

地球ことば村シンポジウム

多言語社会 日本 I

Multilingual Society Japan I

予稿集

地球ことば村
多言語社会 日本
MULTILINGUAL SOCIETY JAPAN

同じじゃないから、豊かな世界。

日本における多様な言語活動をさまざまな角度から考察し、必要な調査を行うシンポジウムシリーズの第一弾です。今回は、戦後のロー・ロー1の言語政策を先鞭として自治体界議会の言語政策を事例に、日本の多言語政策のアイディアと、対称に立脚すると思われる日本語政策である。対称語政策の両面性を提議することも目的としています。

1. 開会挨拶 ことば村理事長
2. 開会 金子 亨 「戦後の多様性～人間の文化の高度」 (13:00-13:15)
3. 開会1 山内 孝子 「ロー・ロー1の経緯と日本の多言語政策」 (13:15-13:30)
4. 開会2 佐野 敦 「多言語社会ロー・ロー1の経緯と日本の多言語政策」 (13:30-14:15)
5. 開会3 中川 隆 「ロー・ロー1の経緯と日本の多言語政策」 (14:15-14:30)
6. 開会4 下塚 隆樹 「ロー・ロー1の経緯と日本の多言語政策」 (14:30-14:45)
7. 開会5 佐藤 隆樹 「ロー・ロー1の経緯と日本の多言語政策」 (14:45-15:00)

15時開演 17時閉演
会場：東京外国語大学本郷サテライト 1号館1F1,000 (定員約)

主催：NPO法人地球ことば村・世界言語博物館
事務局：03-5798-2828

主催：NPO法人 地球ことば村・世界言語博物館
(事務局：03-5798-2828)

日時：2010.03.22(月)13時-17時

会場：東京外国語大学本郷サテライト

<ご挨拶>

阿部年晴(NPO 法人ことば村・世界言語博物館理事長)

国民国家の政策や経済・情報等のグローバル化の影響のもと、消滅の危機に瀕している言語が少なくありません。しかしまた一方では、多彩な言語復興運動・再活性化運動が展開されていることも事実です。

地球ことば村は、各言語をその文化の基礎と位置づけ、広く市民に、国内の方言を含む少数話者言語に関する情報を提供するとともに、話者や研究者との直接の対話交流を重ねています。そうした交流の中で、少数話者言語の豊かさや力強さ、また、それぞれの地域の環境に適応して生きてきた人間集団の創造性に改めて気付かされます。

2008年度には、少数話者言語がおかれている状況について考えるために、シンポジウム『日本語とその隣人たち―身近な危機言語と文化―』を開催しました。

2009年度には、数回に亘ることばのサロン「ことばの復興シリーズ」で、世界各地のことばの復興運動・再活性化運動を取り上げてきました。

今回のシンポジウム『多言語社会 日本』は、その積み重ねの上に立って企画されたもので、日本におけるさまざまな少数話者言語の状況とそれをめぐる運動を取り上げるシリーズの第一回目です。

言語復興運動や再活性化運動を行っている人たちは、どのような状況のもとで、何を考え何を目指しているのでしょうか。どのような困難を抱えているのでしょうか。

また、そのことを私たちが、一人の市民として、他人事ではなく、自分たちとは異なることばを話す隣人たちとの関係の問題として、自分たちの社会全体の問題として受け止めるためには、どういうことが必要なのでしょうか。

さらに、そのような考察を、「ことばの花 咲きみだれる地球」の実現に結びつけるにはどうすればよいのか。このシンポジウムでは、研究者たちの報告と問題提起を受けて、皆さんと共に、その方途を考え、具体的な提案に繋げていきたいと思えます。

地球ことば村の活動は、話者・当事者と研究者と一般の市民を結ぶことを目的としています。本日のシンポジウムが、実り多い議論と交流の場となりますように。

司会：「ヨーロッパの経験と日本の少数言語政策」

金子 亨（千葉大学名誉教授）

このシンポジウムは「多言語社会 日本」の第一回の企画です。次ぎからは在日韓国・朝鮮人、在日中国人の言語問題、日本語諸方言の問題、そして外国語学習の問題などについて順次シンポジウムやフォーラムを開催していく予定です。

1. ヨーロッパはつい50年ほど前まで日常的に戦火の巷でした。しかし今そこは非戦の広域共同体ができて、統合された一つの多国的な政治経済的な機構として、内的にも外的にも進化の途上にあります。今日のシンポジウムではこのヨーロッパのかかえている問題の一つ、多言語状況と多言語政策の問題を検討して、それを日本の問題の解決に役立てようと考えます。そこでまず前半に、ヨーロッパ連合 EU(European Union) とヨーロッパ評議会 CE(Council of Europe)の言語政策の基本的な論点について山川智子さんに紹介していただきます。ついでヨーロッパ内の地域・少数言語の具体的な事例についていくつか佐野彩さんにお話しいただきます。休憩を挟んで後半では日本の問題について考えます。第一に日本の固有な先住民族であるアイヌの言語問題について中川裕さんからお話をいただきます。第二に日本語と同系の琉球語の一番南の方言について下地理則さんに問題点を指摘していただきます。最後に4人の方を中心にして短いパネル・ディスカッションをいたします。

2. 討論の前置きとして EU に加盟していないヨーロッパの国、スイスの少数言語の話をしていただきます。

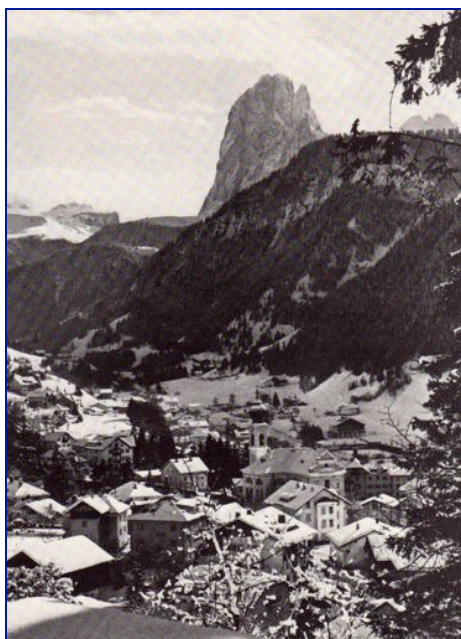
スイス南東部ライン川源流地帯に **Reto-Rumantsch** という少数言語が行われています。この言語は紀元前15年にシーザーの軍隊が南からサン・モリッツ峠を越えて侵入してきた、その後何世紀かにわたってドナウ川上流に大きな国を建てたことがあります。いわゆるレーテ国です。そしてその時代の言語がライン川源流のいくつかの谷間に今日でも生きています。19世紀の80年代に有名なフランスの言語学者がこの言語は1920年までには死滅すると公言したことがあります。しかしこの言語は今も生きています。それはスイス連邦東部の **Glaubuenden/Grischun** 州の公用語の一つとして認められるようにさえなりました。クールという町に **Lia Rumantscha** という立派な研究機関もあって、そこが編纂した辞書と教科書が地域のすべての小学校で使われています。放送も公用文書もルマンチ、ドイツ、イタリアの3言語の使用が義務づけられています。この土地で公務に就くものは「ルマンチが理解できなければならない」という法規まであります。

もちろん、この言語の地位をここまで高めるためには過去一世紀にわたって大変な努力が積み重ねられてきました。そして今日でも相変わらず若年層でますます使われなくなってきたという深刻な問題があります。しかし重要な問題は、このヨーロッパの民主諸国の

一角で少数言語に対する言語政策が地域のレベルで作られ、実践され、次いでそれが国のレベルでも承認されてきた。この地域から州へ、州から国へという政治的な運動と地道な収集・記録の研究活動、それに基づく教育と出版、さらの主要四方言を超えた「共通語」辞書の作成など、こうした努力がこの50年間にわたって一定の成功をおさめたという事実です。確かに、ルマンチ再活性化にたづさわった人々の努力は並大抵のものではありませんでした。その努力と討論の歴史はクールの研究所の文書にすべて記録されています。

1980年代の末に、私はこの研究所で文書をひっくり返しなが、アイヌの村を心に描いていました。細いライン川のほとりの小さな村の暖炉のまわりでは土地のおじいさんの話を聞きながら、阿寒湖のアイヌのおばあさんの顔を思い出していました。そして今日「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会」の報告やそれに対する「世界先住民族ネットワーク・AINU」からの提言をみると、あのスイスの山間の経験がいまこそこの国でも役立ちそうだと思います。北海道で、そして沖縄で。南の海の八重山諸島の人たちが方言の再活性化に取り組んでいるならば、きっとクールの研究所 Lia Rumantscha での討論と同じ問題が論議されているに違いないと思うからです。

それではまずヨーロッパの話を聞きましょう。そしてそこからアイヌと琉球の人々の将来について考えてみたいと思います。



多言語社会ヨーロッパの言語政策

山川智子（東京大学大学院在学、地球ことば村）

ヨーロッパが「多言語社会」と言われる所以は、「書き言葉」における複数の有力な言語の存在である。本発表では、「多言語社会 ヨーロッパ」の言語政策を、欧州評議会の言語政策に焦点をあてつつ概観し、「多言語社会 日本」の言語政策を議論するための材料を提供したい。

現代ヨーロッパは、「国民国家」という枠組みをこえ、「多様性の中の統一」を目指している。その経済的、政治的役割は「欧州連合 (EU)」が担っている。その舞台裏で、主に、文化、言語、人権問題に関する枠組みをつくり、政策提言を行っている組織がある。それが「欧州評議会」という国際機関である。ヨーロッパが戦争再発防止という理念を貫くには、「ヨーロッパ」レベルの経済的、政治的な連帯の他にも、一人ひとりの市民が異文化に対して開かれた姿勢を持ち、人権問題などの価値観を共有するといった「個人」レベルの意識変革も欠かせない。人々の「ヨーロッパ・アイデンティティ」がまだ確立されていない戦後直後から、市民の意識改革という側面について議論していたのが「欧州評議会」である。欧州評議会は、言語に関しては、たとえば、少数言語や、移民のための言語に関する政策、および、言語学習に関する政策をたて、ワークショップなどの行事を開催し、ヨーロッパ市民に広くその考えを広めようとしている。

欧州評議会の言語政策に関する活動を歴史的に振り返るとともに、2001年に公開された文書『欧州共通参照枠(CEFR)』の意義を考え、その中で解決すべき問題として考えられるものを提示したい。さらに、欧州評議会が独自に定義する「**plurilingualism**」概念を「言語権」思想との関わりの中で解釈する。そのことによって、日本の少数言語再生に関しての議論に応用できる部分はどのようなものかを考えていきたい。

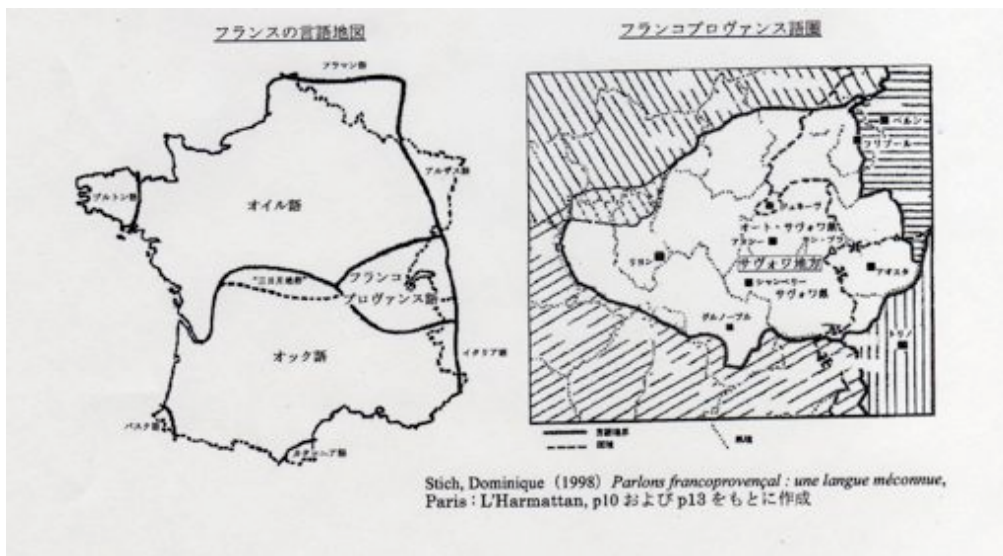
ヨーロッパの地域・少数言語の事例 — フランスのサヴォワ語を中心に

佐野彩（慶應義塾大学研究員、地球ことば村）

本報告では、ヨーロッパの地域・少数言語の言語維持・再活性化の取り組みの事例として、フランス南東部のサヴォワ地方の少数話者言語であるサヴォワ語の事例を取り上げる。

サヴォワ語は、サヴォワ地方を含むフランス、イタリア、スイスにまたがる地域で話されているロマンス系言語であるフランコプロヴァンス語に属する言語である。サヴォワ地方では地域差があるものの 19 世紀末以降、子どもたちの第 1 言語が急速にフランス語になり、第二次世界大戦後になるとサヴォワ語は著しく衰退した。2005 年に現地調査を行った地域では、サヴォワ語を聞いて理解できるのは概ね 60 代以上の人びと、サヴォワ語を話すことができるのは概ね 80 代以上の人びとであった。サヴォワ語の深刻な状況に対する危機感から、サヴォワ語を記録・保存し、未来の世代に継承しようとする活動が 1980 年前後より民間レベルで徐々に進展しつつある。

本報告では、フランスにおける地域語の復興の流れについて概観した後、サヴォワ語の言語維持活動の現状について、現地調査で知り得たことを中心に最近の動きにも触れながら紹介する。特に言語維持活動に携わっている人びとがどのような思いから活動に取り組んでいるのかということについて、サヴォワ地方の人びとのサヴォワ語に対する言語意識も含めて報告したい。ヨーロッパおよびフランスの言語政策の流れの中で、地域に生きる人びとの活動やことばに対する思いに注目することは、日本における少数話者言語の再活性化に対する我々市民の向き合い方に何らかの示唆を与えるのではないかと考えている。



アイヌ語再活性化の現状

中川裕（千葉大学人文社会科学研究科）

アイヌ語の母語話者が現在何人くらいいるのかという質問に、正確に答えられる人はおそらくいない。少なくとも言語習得期にアイヌ語だけで生活していたという人は、もういないだろうし、かりにいたとしてもその数がゼロになるのは時間の問題である。それは危機言語と呼ばれるものが共通して進んでいる道であることも否定できない。しかし、それに対して悲観的になるのは、母語というものに対する信仰、それを絶対視する思考の産物である。アイヌ語を母語として取り戻すためには、社会構造の大幅な改革や、個人の超人的な努力を要求することになり、また、母語という自分では選択できないものを、子供たちに一方的に押し付けることになる可能性も問題になる。また、日本語を母語として生活してきたすでに成人してしまった人たちが、これからアイヌ語を言語学的な意味での母語とできる可能性がゼロであることは、自明の事実である。では、すでに日本語母語話者であるアイヌ人が、アイヌ語を学ぼうとして現在いろいろな活動をしている行為をどう見るのか。母語という概念にとらわれている限り、それはすでに滅んでしまった言語へのノスタルジアということにすぎなくなってしまう。

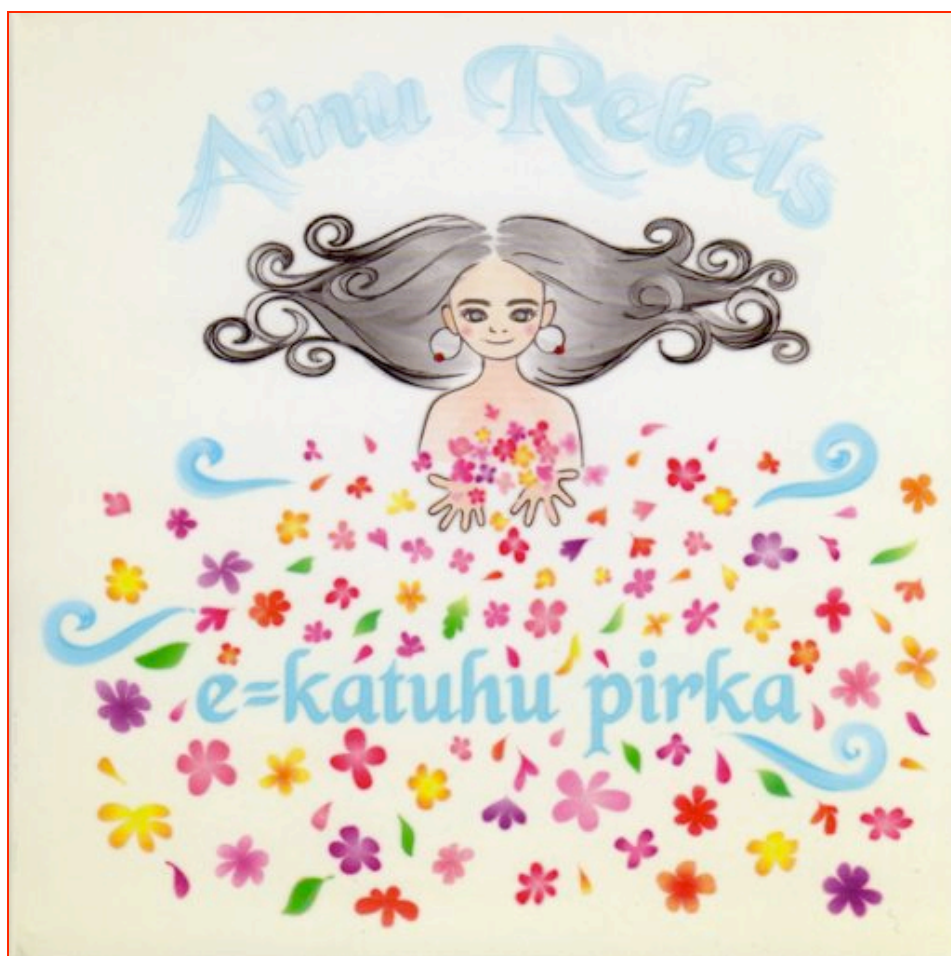
それに対して私が提唱したいのは、「母語」（カッコつきの母語）という概念である。「母語」とは、自分のアイデンティティと結びつけ、自分のものとして考える言葉である。それは現在ひとことも話せなくともよい。ただ、それを「自分の言葉」として少しでも覚えたい、身につけたい、使いたいという意思があり、それに向かって行動しているなら、それはその人にとっての「母語」である。そして、そういう意味でのアイヌ語の「母語」話者は、今増加しつつあるというのが、アイヌ人に対するアイヌ語教育に20年近く関わってきた私のいつわらざる実感である。

その具体的な現れは、たとえばアイヌ文化振興・研究推進機構で主催しているアイヌ語弁論大会「イタカンロー」の参加人数と、その大会への関わり方の変化に見られる。特に2009年度の大会は参加者人数52名と過去最大になり、レベルの高さも参加者同士で話題となっていた。

また、若いアイヌ人で、積極的にアイヌ語に関わろうとする人たちが増えていることも、ここ5年程の特徴である。特に、音楽や芸能の分野で、OKI、Marewrew、Ainu Rebels、Team Nikaopなどが、アイヌ語を積極的に使った活動を試みている。

推進機構を始め、「官製」のアイヌ文化推進に対する批判には大きなものがあるし、その批判—たとえば、それによるアイヌ語の推進は機構の事業内部で完結しているに過ぎない、等—はその通りだと思ふ面も否定しないが、その一方で、より多くの人々がアイヌ語に触れる場を、それらの事業が増やしてきたことを私は評価したい。アイヌ語の再活性化にはアイヌ語の威信を高める必要があり、そのためには、社会を多様な形でアイヌ民族とアイヌ語

に関わらせなければならない。それはアイヌ人自身だけではなく、マジョリティの側が動く必要のあるものである。その一環となるものとして、北大 アイヌ・先住民研究センターの最近の取り組み方や、アイヌ文化研究を志すアイヌ人学生を優遇する札幌大学のウレシパなどの事業について紹介する。今話題の FFXIII のゲーム音楽の一部にアイヌ語が使われているということも紹介しておきたい。



Ainu Rebels の新作CD『あなたかっこいい!』です (勝手宣伝ー kaneko)

琉球語宮古方言の再活性化

下 地理則（群馬県立女子大学）

本発表では、琉球語のうち南琉球地域で話されている宮古方言（特に宮古島に隣接する伊良部島の方言）を対象に、その多言語状況・言語復興に関して、現状の概観と問題提起を行う。発表者は言語政策の専門家ではなく、当該地域の音韻・文法・人類学調査を行うフィールド言語学者である。よって本発表では、フィールドワーカーが現地コミュニティに接する中で見えてきた現状の概観と問題提起、というスタンスを取りたい。

具体的には、以下の内容について言及する予定である。

- ① コミュニティの概要（地理・歴史・産業など）
- ② 伊良部方言に触れてみる（録音・映像）
- ③ 現状概観：
 - (ア) 話者数：島の人口のうち、伊良部方言の話者はどれくらいいるか
 - (イ) 多言語状況：日本語と伊良部方言のバイリンガルについて；彼らの話す日本語について；多言語状況が島の生活のどこに反映されているか；多言語状況が行政レベルで認識されているか
 - (ウ) 伊良部方言の危機の度合い：UNESCOの指針に従って評価をしてみるとどうなるか
- ④ 問題提起
 - (ア) 正書法の問題：仮名かアルファベットか；伊良部島のどの地域の方言を基準にするのか；琉球語全般をカバーする正書法システム開発は可能か？（最近の琉球語若手研究者たちの取り組み）
 - (イ) 文法書の問題：言語学的に精度の高い文法書の重要性；教科書をどうやって作るか；伊良部島のどの地域の方言を基準にするのか
 - (ウ) 「言語復興」とは何を意味するのか；住民は伊良部方言の存続を望んでいるか、望んでいるとすればどういう形式での存続を望んでいるか（コンサルタントの意見の紹介）；言語復興のイニシアチブは誰がとるべきか